
IS インフィニット・ストラトス 妹で介入？！

杉宮 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 妹で介入？！

【Nコード】

N7620X

【作者名】

杉宮 薫

【あらすじ】

転生先はインフィニット・ストラトスの世界？！
主人公の秋奈は5人のヒロインと切磋琢磨しながら、日々成長していく……そんなお話

キャラ設定

主人公

名前 織斑 秋奈

IS名 黒栴 （くろもみじ）

姿 デート・ア・ライブの夜刀神十香にそっくり

性格 ユニーク&一夏だけには厳しいよっ！

能力 サーヴァント召喚・・・本当にサーヴァントを召喚するのではなく、自分の体やISにその召喚したサーヴァントの身体能力などを付加させる程度のもので、宝具も召喚できるが、一部の宝具の効果は弱くなっている。

生前 人のためだけに生き、自分を捨てて生きていた。

オリキャラ

生徒

名前 瀧馬 枝里

IS名 魔女の夜 （ナイト・ウィッチ）

姿 髪が長く、文学少女っぽい雰囲気

性格 基本静かでおしとやかだが、戦闘になると戦闘狂のようになる。

教師

名前 霧ヶ峰 和実

姿 髪が短く、すらっとスレンダー

性格 千冬につぐ厳しさ

キャラ設定（後書き）

これからよろしくおねがいしますっ!!..!

第零話 俺の死、私の始まり（前書き）

よろしくおねがいますっ！！

第零話 俺の死、私の始まり

・・・・・・・・ここは、どこだ？

たしか俺はあるときバスに跳ねられて・・・・・・・・っ！

「クソオ・・・・・・・・っ！」

俺の頬から熱い涙が流れた。

「まだ、なにも出来てなかったのよ・・・・・・・・っ！」

「なにが出来なかったの？」

不意に後ろから掛かる声。

「だ、誰だ！？」

「私？私は　　すっごく可愛い万能女神エリスだけど？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は無言で変な女から距離をとる。・・・・・・・・いや、女神？

「おい！」

「なにかしら？」

「なんで俺は死んだんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・お」

「あ？なんだ？」

「私がドジったから死んだのよっ！！」

「・・・・・・・・・・はあ？！」

いま何て言ったコイツ？！俺が死んだ理由がコイツがミスったからだとか聞こえたぞ！？

「・・・・・・・・・・おい」

「わ、私だって悪いと思ってるんだからっ！だから、もう一度人生を与えてあげるわ！」

「本当に、か？」

闇の中に見えた微かな光を追いかけるように俺はエリスに問いかける。

「ええ、好きな世界にね」

「なら
ISの世界で頼む」

俺は生前好きだった小説の世界を選択する。

「あとはえーっと・・・なにか能力付けられるけど、どうする？」

「なんでもいいのか？」

「瞬考える、がすぐに思い立った。

「なら、『サーバント召還』で頼む」

「細かく設定できるわよ？」

「それなら召還できるのはサーバントの身体能力と宝具のみにしてくれ・・・ってこれじゃあ降霊か？」

俺が考えるような素振りをしていると、

「いや大丈夫・・・だと思っわ。指摘されない限りね」

「指摘・・・？まあいい。早く転生させてくれ」

「わかったわよ。性別は女にしないとあげるから頑張りなさい」

エリスが言い終わった瞬間に俺の視界はブラックアウトした。

俺が、いや私が目を覚ましたとき赤ん坊になっていた。そして、これからの生活にちょっぴり期待を抱いていた私がいた。

第零話 俺の死、私の始まり（後書き）

どうでしたか？短いのは・・・勘弁してくれませんか？

え？駄目？・・・しょ、しょうがないじゃないですかぁー！

！学校とかあつて執筆時間があまりとれないんですよ・・・。

感想などよろしくおねがいします・・・

第一話 始まりはいつも突然に（前書き）

よろしくおねがいしますっ！

第一話 始まりはいつも突然に

転生してからの私の人生は、転生する前の私の人生とは180度真逆な人生だった。

しかも千冬姉に稽古をつけてもらっていたからかどうかはわからないけど、わたしは日本の代表候補生に選ばれ専用機は束さんからプレゼントとして『黒桜《くろもみじ》』を貰った。

「……私、こんなにエリート街道まっしぐらでなにか不幸なことは起きないんだろうか？」

いや、私だつてなにも起きないことを信じたよ！？でもさ前世がアレな人生だったから信じられないんだよ！！どうすればいい、私！！

とかなんとか考えつつ、私はIS学園の廊下を歩く。

「えーっと、1年1組はあー………つとあつたあつた」

1年1組の扉の前に立つ。呼吸を整える。

私はとある事情……。まあ束さんに巻き込まれていた事件の所為でIS学園への入学がすこしばかり遅れてしまっていた。でも大丈夫！まだ時期的にクラス対抗戦はやって

いないはず！いっちゃん最初の楽しそうなイベントを見逃してたまるか！！

『おい、中に入れ』

中から担任の先生と思われる声が聞こえてくる。よしっ！

「はい、失礼します」

扉を開けて教室に入る。すると一番最初に見えたのは、

「織斑秋奈です、訳があつて入学が遅れて今日から皆さんと一緒に
つて一夏兄?!それに千冬姉に箒ちゃんまで?!!」

バシーン!!

「ここでは織斑先生と呼ぶように、いいな織斑 っとこ
れじゃあ被ってしまうかなら.....秋奈。いいな?」

「は、はい.....」

一夏兄はこの前ニュースがやってたからわかるけどなんで千冬姉と
箒ちゃんがここに?

「じゃあ席は.....一番後ろの席が空いてるからそこに座れ」

「はい、わかりました.....」

『あの娘織斑君とどうゆう関係?!』

『一夏兄って呼んでたってことは妹?!』

『織斑君って妹もいたの?!』

なんか周りからすつごく視線を感じるなあ.....何気なく

隣を見ると金髪のお嬢様っぽい人がこっちを見て、

「私セシリア・オルコットといいますの。どうぞお見知りおきを」

「こちらこそ、よろしく願いますね」

うんうんいい人そうで良かった……ってセシリア?! どうしよういきなり原作キャラと交友関係築いちゃったよ私?!!

「分からないことがありましたらこのイギリス代表候補生の私に何でも聞いてくださいっ!!」

「へーイギリスの代表候補生なのね」

うん、知ってる知ってる。イギリス代表候補生ってところはもう原作読んでるから常識として知ってるからさもどうでも良さそうな態度をとるとセシリアが、

「な……っ! なんですよその態度は!」

まあ怒るだろうとは予想してたよ、それがセシリアだもんね。

「だって私日本の代表候補生だからあんま珍しいもんでもないし、ねえ?」

「あら、あなたも代表候補生でしたの? ……そうですわ!!」

ん? なんだかセシリアのテンションがすごく上がってるなあ……
……なんでだろ?

「私と一緒にクラス対抗戦に出ませんこと?!」

「はぁ?!」

どうゆうこと?!クラス対抗戦って代表一人だけが戦うんじゃないの?!?!?!

「それにしても今年からクラス対抗戦のルールが代わって戦争形式になるなんて思いもしませんでしたわ」

「へ、へえーそうなんだあ」

今年からルールが変わったなんて聞いてないよ?!しかも戦争形式って?!総力戦をするの!?

「どんなルールになったの?」

意を決して聞いてみるとセシリアは一瞬キョトンとしたあと、

「ああ、知らないんですたわね。今年から、代表だけではなく代表を含め5対5で対決することになりましたの」

「へえ、そうなんだ……でもさあそれってISの数足りないんじゃない?」

「そこは訓練機や教師達で対応するそうですわ」

「ふーん、でもそれなら専用機持ちが圧倒的に有利じゃない?」

「そういえばそうですね．．．．．、なにか制約が付くのではないのでしょうか？」

制約、かあ。私の場合『サーヴァント召喚』があるから制約もあったもんじやないと思うんだけど．．．．．。まあ使う機会自体今回は東さんが作ったごついIS以外なさそうだけだね。

「まあ、そこらへんはあとから考えない？」

「そうですね。今私たちが考えていても何も変わりませんもの」

「ん？そういえばこのクラスの代表って誰なの？」

「クラス代表ですか？一夏さんですわよ？」

「へえ一夏兄が．．．．．ってええ！！そうなの？！」

ドスッ！

千冬姉が教卓からいつの間にか私の後ろに来て、ありがたいチョップを私の首筋にくれた。

「おおおお．．．．．」

「さっきから少し五月蠅いぞ、秋奈。静かにしろ」

「は、はい．．．．．」

気配が無かった所為で威力を受け流すことも出来なかった．．．．．
・、コレが姉のすることなのかなあ？

ドスッ！

「くだらんことを考えるな」

「すいません・・・」

何で考えてることが分かるのこの人は・・・。。そして何気なしに前の空中投影ディスプレイを見るとちゃっかりクラス対抗戦のメンバーに私を加えられていた。

「クラス対抗戦のメンバーになった人は放課後特別訓練があるので第一アリーナに集合してくださいねー！」

山田先生がそう言った瞬間チャイムがなり朝のHMが終了した。

第一話 始まりはいつも突然に（後書き）

薫「作者とっ！」

秋「秋奈のっ！」

薫& a m p ; 秋「後書きコーナー（仮）！！」

薫「つてことで唐突に始まったこのコーナー。ただ単に私と秋奈が喋るというだけのコーナーです」

秋「どうして（仮）がついてるの？」

薫「はい！今回のテーマがそのことについてだからですっ！！」

秋「てーま？」

薫「今回は初めてだから（仮）を付けました。実際、コーナー名が浮かびません」

秋「キャラの名前は浮かぶのにね」

薫「なので今回いきなりですが、これいいんじゃない？的なコーナー名を募集しようかなと思ったわけですよ」

秋「他人任せですか……………」

薫「そして募集したものの中から三つに絞込み、さらに皆さんに投票してもらい決めたいなあ……………」
「と思ったんですっ！」

秋「・・・・・・・・・・」

薫「だ、だって、思いつかなかったんだもんっ！！しょうがないじやん！！」

秋「ハア・・・・・・・・・・とにかく、こんな駄目な作者の為にコーナー名を考えてくださいお願いします」

薫「お願いしまーす！！あ、コーナー名案は感想に書いてください再びお願いしますっ！！ではっ！！」

第二話 唐突すぎる開戦（前書き）

更新遅れましたっ・・・
宜しく願います。

第二話 唐突すぎる開戦

放課後

うわっ！作者ホントに授業とかすっ飛ばしたよ？！確かに普通の授業とかなら飛ばしてもいいと思うけどIS使った授業とかもあったのに……………。

「はい皆さん集まってますか？」

「集まってるならISを展開しろ」

山田先生はIS展開状態で、千冬姉はジャージ姿でアリーナで待っていた。

「先生、一体何をするんですか？」

篤ちゃんが手を上げて質問すると、

「はい、今年からのクラス対抗戦が5対5の形式でやることになったのは知ってますよね？」

山田先生は笑顔で質問に答えた。

「知ってますが、それが何か……………？」

「対戦形式の中にタッグマッチがあるんです。だから今日はそのタッグマッチに出場する選手を決めようと思ひまして……………」

「なるほど、そうゆうわけか。ここで即席タッグを組んで一番コンビネーションが取れていたコンビを出場させると……でもそれなら

「でも先生、誰と戦うんですか？」

「そう、問題はこの場の誰と戦うかだ。即席タッグ同士を戦わせても私やセシリアみたいな代表候補生はともかく最近ISに初めて触った一夏兄や箒ちゃん、そしてクラスメイトの鷹月さんは操縦技術が拙い。」

「それなら心配は要らない。あともうちよつとで来る筈なんだが

「センパイ！……遅れましたー！！！！！！」

先生と思われる髪の短いスレンダーな女の人が走ってきたと思ったら、いきなり千冬姉に抱きついた。

「「なあ！？」」

千冬姉の性格を知っている私と一夏兄はその様子を見て驚く。だって、あの束さんだって抱きつかうとしてアイアンクロー極められてたんだよ？！この光景はある意味でレアだよレア！！

「霧ヶ峰離れる暑苦しい」

「イタイイタイイタイ！！」

しかし次の瞬間アイアンクローを極められ地へと伏してしまった。
．．．．．なんなんだろうこの人？

「紹介が遅れたな、コイツが霧ヶ峰。私の後輩だ」

「ん？ああ、そういえばこの新兵《ルーキー》達の相手をしてくれて話でしたね？」

「分かったなら早く準備しろ馬鹿」

「わかりました！！」

．．．．．なんか、嵐っぽい人だなあ。ちょっと更識さんに似てるかもしれない。

「じー．．．．．（やっぱり似てるなあ先輩と．．．．．）」

ん？なんか霧ヶ峰先生から見られてるような気がするのはい気のせいかな．．．．．？

「早く行け馬鹿」

「うおう？！わかりましたからアイアンクローだけは止めてくださーいお願いしますっ！！！！」

千冬姉に言われて正気になったのか、すぐに準備を始める。

「えっと、先生．．．．．？」

「もしかして、先生たちのタッグと戦うんですか……………」
「?」

「もしかしなくてもそうだが?」

わお……、教師タッグか。いいねいいねえ。今回『サーヴァント召喚』を使うのは東さん製作の謎のISだけになって思ってたけどレベルによっては使う機会があるかも……………!

「それじゃあ組み分けだが……………、よしオルコットと秋奈お前たちが出る」

「わかりました」

「はい、わかりましたよっ!!!」

「じゃあ準備が出来次第練習試合を始めるから、ISを展開しておけ」

「「わかりました」」

心の中で自分のIS、黒栴《くろもみじ》を呼ぶ。すると左手首の黒いガントレットが光り始め、次の瞬間には展開が終了していた。

「それが、秋奈さんのISですの?」

「うん。……………で、それがブルー・ティアーズ?」

「あら、知ってましたの?そう、これが私のISブルー・ティア

「

「では、始めるぞ!!」

セシリアがIS名を言い終える前に集合がかかる。行かないとね。

「用意はいいな?.....では始めっ!!」

「よしっ!じゃあいつきますかぁー!!」

私は号令がかかると同時に高周波ブレード『虚桜《うつろざくら》』を霧ヶ峰先生に切りかかる、がかし。

「甘い!」

霧ヶ峰先生は後ろに瞬時加速《イグニッション・ブースト》をする
と訓練用ショットガンを呼び出し、こちらへ連射してくる。それを
間一髪のところまで横に跳び回避することができた。.....
.....動きを見る限り、まず千冬姉が指導したのは間違いないね。

「ふう.....危ない危ない」

「チツ.....外したか。でもまあいいかな」

霧ヶ峰先生はチラッとセシリアと山田先生のほうを見ると不敵にニ
ヤリと笑った。.....なんだろうかこの違和感は?

まさかつ!

「じゃあもう少し遊んでやろうか、ね!.....!!」

案の定、霧ヶ峰先生は近接ブレードを呼び出すとこちらに瞬間加速で接近してきた。

「うーん、どうしようかな？」

それを私は虚桜でいなしながら呟く。ホントにどうしようか、先生たちを倒せるかもしれない作戦を思いついたんだけどそれをどうやってセシリアに伝えようか？

「戦場で迷ってたら死ぬぞ新兵《ルーキー》！！！」

「やっぱりそうですよね」

やっぱり霧ヶ峰先生の言うとおり、セシリアに作戦を伝えてくるかなっ！！

「じゃあ頑張りますかねッ！！！」

私は小太刀『霧氷《むひょう》』を呼び出し霧ヶ峰先生を突き飛ばすと連続瞬間加速をしてセシリアに接近した。

「セシリアっ！！！」

「あ、秋奈さん？！どうしたんですの！？」

「先生たちを倒せるかもしれない！！！」

「なんですって？！！」

第二話 唐突すぎる開戦（後書き）

薫「……………」

秋「おい薫。タイトルコールはどうしたの？」

薫「いや、なんでもないよ、なんでもないんだ……………」
「……………」

秋「？まあいいか。皆さんっ！どうぞ感想など、このコーナーの名前をどしどし募集中ですっ！よろしく願いますっ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7620x/>

IS インフィニット・ストラトス 妹で介入？！

2011年10月26日18時23分発行